

第四節 介詞

介詞は、名詞・代詞・詞組を動詞・形容詞に紹介し、場所・時間・原因・方式あるいは比較・対象などの意味をあらわす詞である。介詞と介詞が紹介する名詞・代詞とで介賓詞組を構成し、主に状語となり、補語となることもある。

①@君聞之大驚、出見扁鵲于中闕、（カク君これを聞き大いに驚き、出で扁鵲を中闕に見ゆ。）『史記・扁鵲倉公列伝』

介詞「于」は名詞「中闕」を、動詞「出見」に紹介する。介賓詞組「于中闕」は、場所を表わし、補語となる。

②東風生于春、病在肝、兪在頸項、（東風は春に生じ、病は肝に在り、兪は頸項に在り。）『素問・金匱真言論』

介詞「于」は名詞「春」を、動詞「生」に紹介する。介賓詞組「于春」は、時間を表わし、補語となる。

③故上気不足、腦為之不滿、（故に上気足らず、腦これがために満たず。）『靈樞・口問』

介詞「為」は代詞「之」を、動詞「滿」に紹介する。介賓詞組「為之」は、原因を表わし、状語となる。

④天食人以五氣、地食人以五味、（天は人を食うに五気を以てし、地は人を食うに五味を以てす。）『素問・六節藏象論』

介詞「以」は偏正詞組「五氣」「五味」を、それぞれ動詞「食」に紹介する。この介賓詞組「以五氣」「以五味」は、道具を表わし、補語となる。

⑤与尋常揺鈴求售者迥異、（尋常の鈴を揺るがし售るを求むる者と迥かに異なる。）『串雅・序』

介詞「与」は偏正詞組「尋常揺鈴求售者」を、形容詞「迥異」に紹介する。介賓詞組「与尋常揺鈴求售者」は、対象を表わし、状語となる。

其の外、介詞には「從」「自」「由」「乎」「因」「如」などがある。

⑦善用針者、從陰引陽、從陽引陰、（善く針を用いる者は、陰より陽を引き、陽より陰を引く。）『素問・陰陽応象大論』

⑧曰、彼自遠方來、生死視我一言、質言之、是趣之死也、（曰く、彼遠方より来たり、生死は我が一言を視き、これに質言す。これこれが死を趣すなりと。）『記何元長』

⑨至今天下言脈者、由扁鵲也、（今に至るも天下に脈を言う者は、扁鵲に由るなり。）『史記・扁鵲倉公列伝』

⑩凡病因于外而内連五臟者、皆由乎風也、（およそ病外に因りて内に五臟に連なる者は、みな風に由るなり。）『類經・疾病類』

一、「以」の用法

「以」は介詞として常用されるが、連詞・副詞ともなる。

（一）介詞「以」には以下のようないくつかの用法がある。

1. 動作行為に使用する道具や方式を表わす。

①毒薬則以之攻邪、（毒薬は則ちこれを以て邪を攻む。）『用薬如用兵論』

②水始起也……足脛腫、腹乃大、其水已成矣、以手按其腹、隨手而起、如裹水之、此其候

也、（水始め起こるや……足脛腫れ、腹乃ち大なれば、その水すでに成れり。手を以てその腹を按じ、手に随いて起こり、水を裹むの状の如きは、これその候なり。）『靈樞・水脹』

③無用@石、欲以微針通其經脉、調其血氣、（ヘン石を用いること無く、微針を以てその經脉を通じ、その血氣を調えんと欲す。）『靈樞・九針十二原』

④以一日分為四時、朝則春、日中為夏、日入為秋、夜半為冬、（一日を以て分ちて四時と為せば、朝は則ち春、日中は夏たり、日入は秋たり、夜半は冬たり。）『靈樞・順氣一日分為四時篇』

2. 動作行為のよりどころを紹介する。

⑤外感未去、内傷加増、医者何以処此、（外感未だ去らず、内傷加増すれば、医たる者は何を以てかこれに処する。）『知医必読・診病須知四診』

⑥以手足厥逆、若冷過乎肘膝、便是陰症、（手足厥逆を以て、若し冷肘膝を過ぎば、便ちこれ陰症なり。）『体闕医案』

⑦然其卒発者、不必治于伝、或其伝化有不以次、（然れどもその卒に発する者は、必ずしも伝を治せざるは、あるいはその伝化に次を以てせざる有ればなり。）『素問・玉機真臟論』

⑧腸覃……至其成、如懷孕之状、久者離蔵、按之則堅、推之則移、月事以時下、此其候也、（腸覃は……それ成るに至れば、懷孕の状の如く、久しき者は蔵を離れ、これを按ずれば則ち堅く、これを推せば則ち移り、月事時を以て下る、これその候なり。）『靈樞・水脹』

⑨病以人殊、治以疾異、（病は人を以て殊なり、治は疾を以て異なる。）『針灸大成』

3. 動作行為発生の原因を紹介する。

⑩陽明病にて、汗出ずること多くして渴する者は、猪苓湯を与う可からず。汗多く胃中燥き、猪苓湯はまたその小便を利するが故を以てなり。）『傷寒論・224条』

⑪輕者以重、重者以死、（輕き者は以て重く、重き者は以て死す。）『温病条辨・叙』

⑫仮令尺中遲者、不可発汗、何以知其然、以榮氣不足、血少故也、（もし尺中遅なる者は、発汗す可からず。何を以てその然るを知るか。榮氣足らず、血少なきが故を以てなり。）『傷寒論・50条』

4. 動作行為発生の時間を表わす。

第1に、時間を表わす。

⑬以冬遇此者為骨痺、以春遇此者為筋痺、（冬を以てこれに遇う者は骨痺と為り、春を以てこれに遇う者は筋痺と為る。）『素問・駢論』

⑭診法如何、診法常以平旦、（診法は如何せんと。診法は常に平旦を以てす。）『素問・脈要精微論』

第2には、形容詞の下に用い、「……の面で」を表わす。

⑮衆叛親離、難以濟矣、（衆叛し親離れ、以て濟い難し。）『左伝・隱公四年』

5. 介詞「以」の凝固構造

「以」を使用する凝固構造がある。その中には「是以」「有以」「無以」「可以」などがある。

(1)「是以」

介詞「以」は「因」の意で、「是以」は「以是」である。これは介詞「以」の賓語の提前なので、因果関係を表わす。

- ⑮ 溼是以春傷于風、邪氣留連、乃為洞泄、（ここを以て春風に傷られ、邪氣留連すれば、乃ち洞泄と為る。）『素問・生氣通天論』
- ⑰ 溼今在骨髓、臣是以無請也（今骨髓に在り、臣ここを以て請うこと無し。）『史記・扁鵲倉公列伝』

(2) 「有以」「無以」

これは介詞「以」と動詞「有」「無」の連用である。これはそれぞれ「有所以…」 「無所以…」の習慣的な省略である。「…する方法がある」「…する方法がない」の意である。

- ⑮ 溼因奮然鼓念、冀有以發隱就明、轉難為易、盡啓其秘、而公之于人、務俾後学了然、（因って奮然として念を鼓し、以て隱を發し明に就くこと有り、難を轉じて易と為し、尽くその秘を啓き、しかしてこれを人に公にし、務めて後学をして了然たらしめんことを冀う。）『類經・序』
- ⑰ 溼非有以治其外、疾未易為也、（以てその外を治する有るに非ずんば、疾未だ為し易からず。）『優志齊集・指喻』
- ⑳ 溼無陽則陰無以生、無陰則陽無以化、（陽無ければ則ち陰以て生ずる無く、陰無ければ則ち陽以て化する無し。）『医宗必読』

21 今無以追兮、後慎觀之。（今以て追う無し。後に慎んでこれを觀よ。）『辨伏神文并序』

(3) 「可以」 これには2種の用法がある。

一つは、一体不可分の双音詞とみなし、能願動詞となる。「可」「能」と同義である。「以」は作用が無い。

22 湿淫所勝、……少腹痛腫……腰似折、髀不可以回、（湿淫の勝る所、……少腹痛み腫れ……腰折るるに似、髀以て回る可からず。）『素問・至真要大論』

もう一つは、「以」は介詞であり、「可」は能願動詞の場合。

23 夫脈之小大滑澁浮沈、可以指別、五臟之象、可以類推、……五色微診、可以目察、（それ脈の小・大・滑・澁・浮・沈は、指を以て別つ可し。五臟の象は、類を以て推す可し。…五色の微診は、目を以て察す可し。）『素問・五臟生成論』

24 夫至物微妙、可以理知、難以目識、（それ物の微妙に至っては、理を以て知る可く、目を以て知り難し。）『養生論』

6. 「以為」

二つの用法がある。一つは、双音詞とし、「とする」「とみなす」の意である。

25 有一郡守篤病久、佗以為盛怒則差、（一郡守の篤病久しき有り、佗以為えらく盛んに怒れば則ち差ゆと。）『後漢書・方術列伝』

もう一つの用法は、介詞「以」の後ろの賓語「の」が省略されている場合である。

26 自古聖人之作湯液醪醴者、以為備耳、（古より成人の湯液醪醴を作る者は、以て備えを為すのみ。）『素問・湯液醪醴論』

この「以為」は「以之為」であり、「の」が省略されている。

27 石膏大寒、寒能勝熱、故以為君、（石膏は大寒、寒は能く熱に勝つ。故に以て君と為す

。)『傷寒論注』

(2)「以…為」

「以」は介詞、「為」は動詞である。これには二つの用法がある。

一つは、「…を…と認定する」の意である。

28世之処方者、以一藥為不足、又以衆藥益之、(世の方を処方する者は、一藥を以て足らずと為し、また衆藥を以てこれを益す。)『良方・自序』

もう一つは、「…を…とする」の意である。

29以長為短、以白為黒、如是則精衰矣、(長を以て短と為し、白を以て黒と為す。かくの如くんば則ち精衰えたり。)『素問・脈要精微論』

(2) 連詞

連詞「以」には次の四つの用法がある。

1. 並列連詞。二つの並列した形容詞・形容詞性詞組をつなぐ。

30疽者、上之皮天以堅、上如牛領之皮、癰者、其皮薄以沢、此其候也、(疽は、上の皮天にして堅く、上 牛領の皮の如し。癰は、その皮薄くして沢あり。これその候なり。)『靈樞・癰疽』

31脈弱以滑、是有胃氣、(脈弱にして滑なるは、これ胃氣あり。)『素問・玉機真藏論』

2. 目的連詞。二つの動詞あるいは動詞性詞組をつなぎ、動作の目的あるいは結果を表わす。

32潮熱者、実也、先宜服小柴胡湯以解外、後以小柴胡加芒硝湯主之、(潮熱は、実なり。先ず宜しく小柴胡湯を服し以て外を解すべし。後に小柴胡加芒硝湯を以てこれを主る。)

『傷寒論・104条』

33宜一味黄芩湯、以瀉肺經氣分之火、(一味黄芩湯に宜しく、以て肺經氣分の火を瀉す。)

34篇目墜缺、指示不明者、量其意趣、加朱字以昭其義、(篇目墜缺し、指示明らかならざる者は、その意趣を量り、朱字を加えて以てその義を昭かにす。)『内經素問注・序』

36有当温而温之、不量其人、不量其証、以誤人者、(当に温むべくしてこれを温むるに、その人を量らず、その証を量らず、以て人を誤る者有り。)『医学心悟』

36疾如蠱、非鬼非食、惑以喪志、(疾 蠱の如きは、鬼に非ず食に非ず、惑いて以て志を喪う。)『左伝・昭公元年』

3. 承接連詞。二つの動詞・動詞性詞組をつなぎ、時間上の先後を表わす。

37語子至道之要、病傷五臟、筋骨以消、(子に至道の要を語らん。病五臟を傷れば、筋骨以て消ゆ。)『素問・著至教論』

38居無何、尽得其術以帰、(居ることいくばくも無く、尽くその術を得以て帰る。)『丹溪翁伝』

4. 因果連詞。句と句とをつなぎ、原因を表わす。

39太陽病、小便利者、以飲水多、必心下悸、(太陽病にて、小便利する者は、飲水多きを以てなり、必ず心下悸す。)『傷寒論・127条』

40下利、欲飲水者、以有熱故也、白頭翁湯主之、(下利し、水を飲まんと欲する者は、熱有るが故を以てなり。白頭翁湯これを主る。)『傷寒論・373条』

(三) 副詞。「すでに」「はなはだ」

41子之@也、而反有于余、不以過乎、(子のみだるるや、しかるに反って余に尤がむるは、はなはだ過ならざらんや。)『柳河東集・辨伏神文并序』

42固以怪之矣、(固よりすでにこれを怪しめり。)『史記・陳涉世家』

この外、「以」は動詞や名詞ともなる。

43子以吾言不誠、試入診太子、……当尚温也、(子吾が言誠ならずと以わば、試みに入り太子を診よ。……当になお温かなるべし。)『史記・扁鵲倉公列伝』

44致微痾@成膏肓之变、滞固絶振起之望、良有以也、(微痾 膏肓の変と成り、滞固 振起の望みを絶つを致すは、良に以有るなり。)『脉経・序』

二、「于」の用法

「于」は、「於」とも書かれる。これは古漢語中応用の最も広い介詞であり、表わす関係は多く自在である。しかし、帰納すると、常見されるのは以下のいくつかの用法である。

(一) 動作行為あるいは叙述の対象を表わす。

①昔欧陽子暴利幾絶、而乞薬于牛医、(昔欧陽子暴に利し幾ど絶えんとし、薬を牛医に乞う。)『串雅・序』

②(華佗)精于方薬、(華佗は方薬に精し。)『後漢書・方術列伝』

③尽啓其秘、而公之于衆、(その秘を啓き、しかしてこれを衆に公にす。)『類経・序』

(②) 動作行為の場所あるいは時間を表わす。

第1には、場所を表わす。動作の地点・位置・時間を表わす。

④胆附于肝、相为表裏、肝氣雖強、非胆不断、肝胆相濟、勇敢乃濟、故曰決断出焉、(胆は肝に付き、相表裏を為す。肝氣強しと雖も、胆に非ずんば断ぜず。肝胆相濟け、勇敢乃ち成る。故に曰く決断これより出づと。)『類経・序』

⑤心、繆惕思慮則傷神、神傷則恐惧自失、破@脱肉、毛悴色夭、死於冬、(心、繆惕思慮すれば則ち神を傷る、神傷るれば則ち恐惧自失し、@を傷り肉を脱し、毛悴し色夭し、冬に死す。)『靈樞・本神』

⑥如李東垣偏于温和、有似乎春、竇真定偏于火攻、有似乎夏、(李東垣は温和に偏し、春に似る有り、竇真定は火攻に偏し、夏に似る有るが如し。)『医必備四時五行元氣論』

第2は、所自を表わす。動作行為の起始を紹介する。

⑦陽受氣于上焦、以温皮膚、分肉之間、(陽は氣を上焦より受け、以て皮膚・分肉の間を温む。)『素問・調經論』

⑧方書始于仲景、仲景之書專論傷寒、此六氣中之一氣耳、(方書は仲景に始まる。仲景の書は専ら傷寒を論ず。これ六氣中の一氣のみ。)『温病条辨』

第3には、所至を表わす。動作行為の帰趨を紹介する。

⑨飲入于胃、游溢精氣、上輸于脾、脾氣散精、上歸于肺、通調水道、下輸膀胱、(飲胃に入り、精氣を游溢し、上に脾に輸り、脾氣は精を散じ、上に肺に輸り、水道を通調し、下に膀胱に輸る。)『素問・經脉別論』

⑩故人臥血歸于肝、肝受血而能視、足受血而能歩、掌受血而能握、指受血而能撰、(故人臥すれば血は肝に歸す。肝は血を受けて能く視、足は血を受けて能く歩み、掌は血を受けて能く握り、指は血を受けて能く撰る。)『素問・五臟生成論』

(三) 比較の対象を表わす。通常、形容詞・形容詞詞組の後において比較の対象を紹介する。

⑪中焦……化其精微、上注于肺脈、乃化而為血、以奉生身、莫貴于此、(中焦は……その精微を化し、上に肺脈に注ぎ、乃ち化して血と為り、以て生身を奉ず。これより貴きものは莫し。)『靈樞・營衛生會篇』

⑫盛者、寸口大三倍于人迎、虚者、則寸口反小于人迎也、(盛る者は、寸口 大なること人迎より三倍す。虚する者は、則ち寸口 反って人迎より小なり。)『靈樞・経脉偏』

(四) 動作行為の主動者を表わす。「于」を他動詞の後に用い、受身を表わす。

⑬春傷于風、邪氣留連、乃為洞泄、夏傷于暑、秋為㊦瘧、(春に風に傷られ、邪氣留連し、乃ち洞泄と為る。夏に暑に傷られ、秋に㊦瘧と為る。)『素問・生氣通天論』

(五) 動作行為の発生の原因を紹介する。

⑭其咎在于無定見、(その咎は無定見に在り。)『景岳全書・卷一』

⑮夫㊦瘧皆生于風、(それ㊦瘧はみな風より生ず。)『素問・瘧論』

三、「為」の用法

「為」は本来動詞であるが、古漢語では介詞として常用される。

(一) 動作行為の対象を表わす。

①夫五味入口、蔵于胃、脾為之行其精氣、(それ五味は口に入り、胃に蔵され、脾これがためにその精氣を行らす。)『素問・奇病論』

②為人治病、決死生、多驗、(人のために病を治し、生死を決し、驗多し。)『史記・扁鵲倉公列伝』

(二) 動作行為発生の原因を紹介する。

③故工不能治其已発、為其氣逆也、(故に工そのすでに発するを治する能わざるは、その氣逆するがためなり。)『素問・瘧論』

④心肺有病、而鼻為之不利也、(心肺に病有り、しかして鼻これがために利せざるなり。)『素問・五臟別論』

(三) 動作行為の目的を紹介する。

⑤今余刻此図、為願医林中人、一見此図、胸中雪亮、眼底光明、臨証有所遵循、(今余この図を刻するは、医林中の人、一たびこの図を見れば、胸中の雪亮かに、眼底光明、証に臨み循循する所有るを願うがためにす。)『医林改錯』

⑥我為朱先生来、豈責爾報耶、(我朱先生のために来る、豈に爾が報を責めんや。)『古今圖書集成・医部録』

(四) 動詞の所向を紹介する。「言」「道」などの動詞と配合する。

⑦況余所論三法、識練日久、至精至熟、有得無失、所以敢為来者言也、(況や余の論ずる所の三法は、識練日久しく、至って精に至って熟し、得有るも失無く、敢えて来る者のために言う所以なり。)『汗下吐三法該尽治病詮』

⑧不足為外人道也、(外人のために言うに足らざるなり。)『桃花源記』

(五) 動作行為の主動者を紹介する。受身になる。

⑨顧其方、……不免夸新斗異、為国医所不道、(その方を顧みるに、……新を夸り異と斗うを免れず、国医の道わざる所と為る。)『申雅・序』

⑩營衛運行之機、乃為邪之所阻、吾身之陽氣、為邪所遏、故為病熱矣、（營衛運行の機は、乃ち邪の阻む所と為り、吾が身の陽氣は、邪の遏する所と為る。故に熱を病むと為る。）『温疫論・原病』

この外、「為」は動詞となる。

⑪其入深、内搏于骨、則為骨駢、（それ入ること深く、内に骨に搏てば、乃ち骨駢と為る。）『靈樞・刺節真邪論』

最後に、「何以……為」の構造がある。「為」は動詞、「何」は疑問代詞で、「為」の前置賓語である。「以…」は介詞構造で、「為」の状語である。つまり「以……為何」の倒置である。

⑫或曰、運用之妙、在乎一心、何以方為、（あるひと曰く、運用の妙は、一心に在り、何をか方を以て為さん。）『医方集解・序』

⑬聖賢一言、終身行之弗尽、奚以多為、（聖賢の一言は、終身これを行うも尽きず、奚をか多を以て為さん。）『丹溪翁伝』

四、「与」の用法

「与」は主として介詞であるが、動詞・連詞・語気詞ともなる。

（一）介詞

1. 対象を表わす。動作行為の対象を示す。

①暴厥者、不知与人言、（暴に厥する者は、人と言うを知らず。）『素問・大奇論』

②所以然者、本発熱六日、厥反九日、復発熱三日、并前六日、亦為九日、与厥相応、故期之旦日夜半愈、（然る所以は、もと発熱すること六日、厥すること反って九日、また発熱すること三日、前の六日に并わせて、また九日と為り、厥と相応ず。故にこれを旦日夜半に愈ゆと期す。）『傷寒論・322条』

2. 比較を表わす。

③故不依時采取、与朽木不殊、虚費人功、卒無裨益、（故に時に因り采取せざれば、朽木と殊ならず、虚しく人の功を費やし、卒に裨益無し。）『千金翼方』

④中国与边境、猶肢体与腹心也、（中国と边境とは、なお肢体と腹心との如くなり。）『塩鉄論・誅秦』

3. 方式を表わす。

⑤嘔不止、心下急、鬱鬱微煩者、為未解也、与大柴胡湯下之則愈、（嘔止まず、心下急し、鬱鬱として微かに煩する者は、未だ解せずとなすなり、大柴胡湯を与えこれを下せば則ち愈ゆ。『傷寒論・103条』

⑥傷寒脈遲、六七日、而反与黄芩湯徹其熱、脈遲為寒、今与黄芩湯復除其熱、腹中応冷、当不能食、（傷寒にて脈遲、六七日にして、反って黄芩湯を与え其の熱を徹す。脈遲は寒なり。今黄芩湯を与えまた其の熱を除けば、腹中当に冷ゆべく、当に食らう能わざるべし。）『傷寒論・333条』

（二）連詞

主に並列関係を表わす。

⑦臟者、人之神氣所舎藏也、故肝蔵魂、肺蔵魄、心蔵神、脾蔵意与智、腎蔵精与志也、（臟は、人の神氣の舎藏する所なり。故に肝は魂を蔵し、肺は魄を蔵し、心は神を蔵し、脾

は意と智とを蔵し、腎は精と志とを蔵するなり。)『難経・第三十四難』

⑧太陽与陽明合病、喘而胸滿者、不可下、宜麻黄湯、(太陽と陽明との合病にて、喘して胸滿する者は、下す可からず、麻黄湯に宜し。)『傷寒論・三十六条』

介詞「与」と連詞「与」との区別は容易ではない。この両者のちがいは、次の如くである。第一に、介詞「与」の前後は、一つは文の主語であり、もう一つは「与」で構成される介賓詞組であり、動詞の状語となる。この二つは、交換できない。第二は、「与」の前後の品詞が異なる場合は、介詞である。これに対して、連詞「与」のつなぐ二つは同じ品詞である。第三は、「与」の前に修飾するものがある場合には、介詞である。連詞「与」の前には、一般に修飾するものはない。

「与」は語気助詞ともなる。語気を緩やかにする作用がある。

⑨難者仍未能明、精処仍不能発、其何禪之与有、(難き者はなお未だ明らかにする能わず、精なる処はなお発する能わず、それ何の禪かこれ有らん。)『類経・序』

この外、「与」は動詞ともなる。

⑩佗臨死出一卷書与獄吏曰、此可以活人、(佗死に臨み一卷の書を出だし獄吏に与えて曰く、これ以て人を活かす可しと。)『後漢書・方術列伝』